こどもがしるべき

テモテへの手紙第一

パウロがローマで最初の投獄（監獄に閉じこめられること）を終えて、マケドニヤで伝道旅行をしていました。そのとき、パウロがエペソで牧会をしているテモテにあてて書いた二通の手紙のうちの１つ目がテモテへの手紙第一です。

エペソ教会は、律法主義とグノーシス主義のために大変な状態でした。ユダヤ主義的な律法主義者は、イエス・キリストをメシヤと信じながらも「救いは信仰によってではなく、モーセの律法を守ってこそ、救われるのだ」と教えました。グノーシス主義者は、ギリシヤ人哲学の影響で、たましいだけが重要だと思っていました。肉体を重要だと思わないので、極端な考えや選択をしたりしました。禁欲主義（訓練や修練という意味、特に肉体に関係する自分の訓練の実践を追及する思想や態度）と肉的な快楽主義になったのです。なによりも、イエス・キリストの神性（イエス・キリストは神様として来られたこと）を認めたのですが、人性（人として来られたこと）は認めませんでした。

パウロは、テモテへの手紙を通して

１つ目、異端のまちがった教理をなくして、ただイエス・キリストを通しての救いを正しく悟って、霊的な戦いをしなければならないと記録しました。

２つ目、礼拝の秩序確立と監督、執事など、教会の指導者が、霊的、道徳的に生活の模範を見せるように、彼らに対する指針を記録しました。

３つ目、まことの教師、まことの牧会者の指針を通して、牧会者テモテが信徒の模範になるべきだと記録しました。

レムナントもやはり、イエスがキリストという正しい福音を曇らせる考えや雰囲気に勝つ、霊的な戦いが必要です。伝道者パウロに会った若いテモテを、エペソ教会の牧会者として立てられた神様は、レムナントをも福音の中で伝道者として立てることを願っておられます。９月には、私を霊的指導者、霊的主役として呼ばれた神様が準備された私、私のこと、私の現場を見つけるように祈りながら、テモテへの手紙第一を黙想しましょう。